



Special Talk

知識を得るということ

西 正典

日本生命保険相互会社特別顧問
元防衛事務次官

長野県の飯田市に鼎という地区がある。地図では長らく飯田市の隣に鼎町として記載されていたが、実態は市の中央部にある。昭和59年に合併するまで、周囲を飯田市に取り囲まれながら独立の町として28年間に亘り存在するという面白い歴史がある。

この町のことを知ったのは昭和40年、通っていた塾で日本の地名を探すというゲームを通じてである。ところが小さな町なので、小学生の使う地図帳では記載されているものとされていないものがあり、ちょっとした混乱が起こった。私の通っていた小学校の地図帳には載っていなかったので不戦勝ということになったのだが、何となく悔しくて親に頼んで新しい地図帳を買ってもらった。もちろん鼎町が載っているものである。

平成3年に成立した宮澤内閣で秘書官としてお仕えした宮下創平防衛庁長官が偶然にも伊那・駒ヶ根・飯田の3市を含

む当時の長野3区を選挙区とされていたのでおたずねしたところ、鼎町の地理について以上のようなことを教えて頂いた次第である。

知識というものは、無味乾燥な文字の列ではない。必ずそこに何かの意義づけがあり価値判断が含まれている。インターネットを使えば飯田市の歴史や鼎地区のことなどすぐにわかるようになったが、当時では百科事典を引いても判然としなかった。便利になったと思う。他方、ディスプレイの上に並ぶ情報の裏に必ず編集した者の価値判断があるということが見えにくくなった。誤った情報が含まれていた場合に容易に信じてしまうことになる。私がバロン西の孫という情報が月刊誌の記事だけを根拠に Wikipedia に記載されていたことがあり、削除するのに手間取ったのなどはその一例だろう（聞かれた時には、あちらは薩摩で戊辰の役の官軍、我が家は米沢で賊軍側、と

説明している)。

インターネットが登場する前に大学を卒業した私にとっては、知識はそれを知っている人から教えていただくものだった。そのためには、誰がその情報を持っており、その人にアプローチするためには自分の知っている誰に頼むべきか、ということを考えねばならず、日頃からいろいろな方を訪ねては教えを乞うことの繰り返しだった。そうした中でお目にかかったのが関西財界のあるご隠居様だった。40年も前のことである。

おうかがいしたお話は不思議なものが多く、多少なりとも自分で調べて納得できるようになったものはごく僅かである。未だに確信がある訳では無いが、多分そんなことがあったのだろうと思っている事案が終戦を決定した御前会議の様子についての故迫水久常氏の話である。

ご老人が氏から聞いたところによれば、陛下のお怒りは大変なもので会議は直ちに降伏することで直ちに決したのだが、問題は立憲君主制の憲法のもと陛下に責任が及ばぬようにする筋立てをどのようにするかだったという。閣論二分して鈴木総理が陛下のご聖断を仰いだというのが巷間伝えられているところだが、あれは作り話ということらしい。20年ほど前に迫水のオーラルヒストリーが公開されたが、彼はこうした事情を窺わせるような手掛かりを一切話していない。

私が伝え聞いたものは何だったのだら

う。

迫水がご老人をたばかったのか？それとも、ご老人が私にありえぬ話をしたのか？

この話についての理解を深めることとなった多少の手がかりは、市ヶ谷記念館の収蔵品にあった。元西方総監だった竹下正彦が昭和40年代に東部方面総監部に寄贈した「昭和天皇任官時の御佩刀」と伝えられるサーベル一振りである。他のものと明らかに違うこの刀を持ち込んだ竹下は、終戦時陸相だった阿南の義弟である。陛下から阿南へ、そして阿南から竹下へと託されたということならば、当時陸軍中佐だった竹下がこのような品を戦後20年余りお守りしたことも理解できよう。御前会議が開かれた8月9日の深夜から13日に最後の参内、そして15日未明に亡くなられるまでの間にどのような動きがあったのかは残念ながら分からない。

陛下賜のことについては『昭和天皇実録』に記録があるはずだが、そこまではまだ調べていない。

もし、『実録』に記載がなかったら？
それは謎ということになる。

そして、謎もまた知識の一部となるものである。

歩かなければ辿り着かなかった何ものが、確かに存在していることだけは間違い無いだろう。